

民族を越えるカヴァ・コモディティチェーン

大島 崇彰

一 はじめに

フィジー（図1）では伝統的に、コショウ科の植物カヴァ（学名：*Piper methysticum*、現地語でヤンゴナ：*Yaqona*）の根を原料とする嗜好品が儀礼などの際に飲用されてきた。カヴァの伝統性に注目した研究の蓄積は多く、なかでもフィジーにおいては、カヴァ飲用が不可欠なプロセスである儀礼を分析対象とし、その社会的機能や象徴的意味が論じられてきた [e.g. Bott 1987 ; Turner 1995]。他方で、カヴァは儀礼以外でも日常的に飲用されてきた。かつてそうした飲用は先住系フィジー人、とりわけ首長制の高位にある中高年男性に限定されていたが、現在では平民や若者・女性の間でも一般的になり、また民族を越えて普及している。加えて1980年代から90年代以降は、欧米諸国でカヴァの鎮静効果をはじめとする薬効に注目が集まり、医薬品・健康補助食品の原材料として利用されるようになったため、国外市場においても需要が増加傾向にある [Lebot et.al 1992]。こうした影響を受け、近年フィジーにおけるカヴァの生産量は増加しており、年毎の変動はあるものの、2021年の生産量は1995年のおおよそ5倍を記録している¹（表1）。

¹ フィジーにおけるカヴァの生産量の急増が全面的にカヴァの国外需要の増加に起因しているわけではない。フィジー国内で生産されるカヴァの9割以上は国内で消費されており、輸出割合は1割に満たない [PHAMA 2018]。

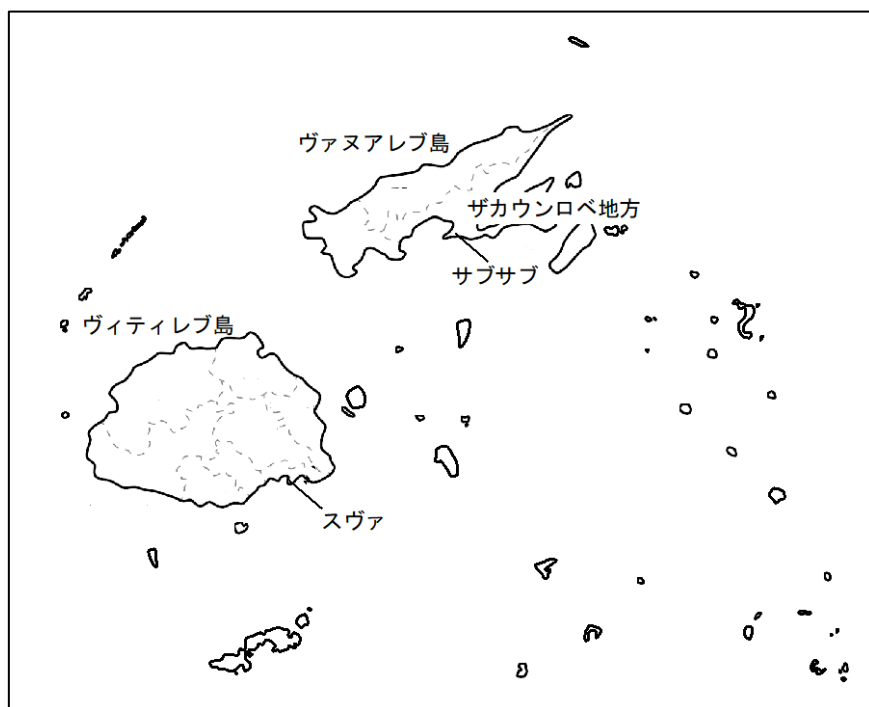
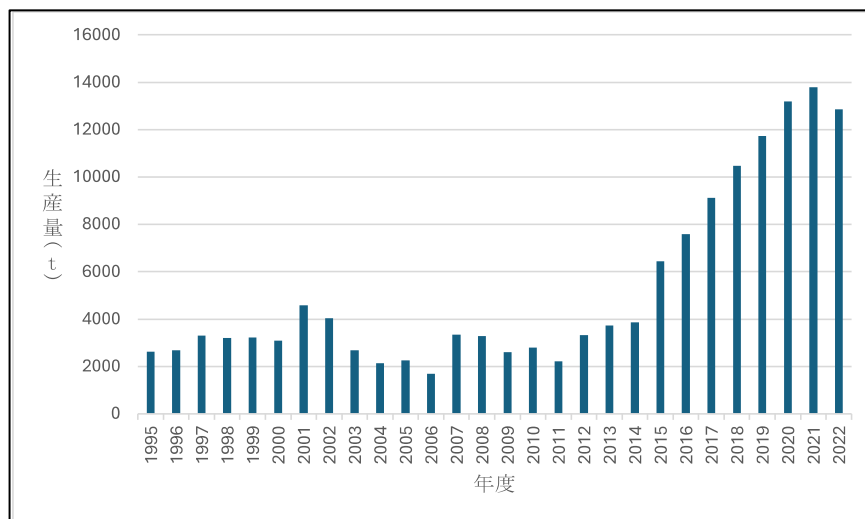


図 1 フィジー概略図 (筆者作成)

表 1 フィジー国内のカヴァ生産量の推移

(Fiji Bureau of Statistics のデータをもとに筆者作成)



本稿では、こうしたカヴァの需要増加と生産量の拡大の影響下にある現代フィジーのカヴァ

ア・コモディティチェーンに注目し、その中でもフィジー国内において民族横断的に行われるカヴァの生産・流通の実態についてその一端を明らかにする。とりわけ、これまで断片的に指摘されてきたインド系住民のカヴァ産業への関わりを詳らかにしながら、筆者の調査により明らかになった中国系住民や日系住民によるカヴァ産業への関与の実態を指摘する。

本稿の主なデータは、文献資料、ウェブサイトから得た情報に加え、フィジー第二の島であるヴァヌアレブ島のザカウンロベ地方サブサブ地域を中心に筆者が行った 2022 年 10 月、2023 年 3 月の短期調査および、同 2023 年 3 月にヴィティレブ島の首都スヴァを中心に河合洋尚氏（東京都立大学）と共同で行った短期調査のデータに基づいている。

二 多民族社会フィジー

筆者の調査地であるフィジー共和国は、複数の民族集団によって構成される多民族社会である。フィジーの人口構成をまとめたセンサスによると、2021 年の段階で人口は約 93 万人、そのうち先住系フィジー人（現地語で *iTaukei*）が約 56 パーセントを占め、インド系フィジー人が約 37 パーセント、その他住民（ヨーロッパ系住民、ロトゥマ人、フィジー以外の島嶼系住民、中国系住民）が約 5 パーセントとなっている。ここで本稿において主に取り上げるインド系フィジー人と中国系住民に関して若干の説明を加えておく。

現在人口の約 4 割を占めているインド系フィジー人は、イギリス植民地期の 1879 年から 1916 年にかけてサトウキビプランテーションでの労働力として導入された人々の末裔に当たる。1940 年代には先住系フィジー人の人口を上回ることもあったが、民族対立に端を発した 1987 年のクーデターとその後の政治的混乱の中で、国外に移住する人々が増加したことにより、人口割合は減少している。入植以降、サトウキビ産業の成長の中で商業活動に進出する層が出現したほか、教育への投資を通じて、経済的にフィジー国内で一定の足場を築いている [丹羽 2010]。

一方で、人口割合としては 1 パーセントに満たないものの、インド系フィジー人と同様に商業活動において一定の地位を築いているのが中国系住民である。中国人がフィジーに訪れ始めたのは 18 世紀から 19 世紀前半とされ、白檀やナマコを求める船に同乗していたとされる [河合・大島 2024]。1940 年代に入り、太平洋戦争が始まると、フィジーに駐在する軍人に物資を提供するため多くの中国人が来島し、中華人民共和国が成立する 1949 年までには中国系住

民の人口は 3,000 人に達した [河合・大島 2024]。21 世紀に入った現在でも中国系移民は継続的に流入を続けており（フィジー国外への流出も多いため人口割合の大きな増減は見られない）、スヴァなどの都市部を中心に、商業活動を行っている [丹羽 2010; 河合・大島 2024]。

三 現代フィジーのカヴァ・コモディティチェーン

これまで、フィジー国内のカヴァの生産・流通に関しては一定程度報告されてきたが、それぞれの領域つながり、とりわけそこに見られる民族間分業に関しては不明瞭な部分が多いとされてきた [Murry 2000]。また、生産・流通にみられる民族間分業を論じたものでも、生産を行う先住系フィジー人農家と仲介・加工業を担うインド系業者の二つの民族集団の関与を断片的に取り上げたものが中心と言え [e.g. Murry 2000 ; PHAMA 2018]、カヴァの生産・流通への他の民族集団の関与に関しては明らかになっていない。以下では、現代フィジーにおけるカヴァ・コモディティチェーンの実態の一端を捉えるべく、先住系フィジー人農家とインド系仲介・加工業者のつながりを明らかにすることに加え、筆者の現地調査から垣間見えた、中国系住民や日系住民によるカヴァ産業との関わりを指摘する。

フィジー国内のカヴァ・コモディティチェーンは、カヴァの生産を行う農家、農家からカヴァを買い取り都市部の市場に流通させる仲介業者、カヴァの製品加工を行う加工業者、都市部の商店や市場でカヴァの販売を行う販売行者、カヴァの海外への輸出を行う輸出業者、など複数のアクターから構成されている²。カヴァ農家の多くは、植民地政府の先住民保護政策のもとで排他的な土地の所有権が認められ、現在もフィジーの土地の 8 割以上の所有権を堅持している先住系フィジー人の農家である。土地を借り、大規模なプランテーションを行うインド系フィジー人や、少数のヨーロッパ系の土地所有者などによるプランテーションもみられるが、先住系フィジー人農家によるカヴァ栽培が主流である [Murry 2000 : 368]。また 1930 年代の段階で、すでに中国系住民が商品としてカヴァの栽培をしていたとされる報告があり [Prasad and Raj 2006 : 385]、筆者の調査地の住民からも中国系住民による大規模なカヴァ栽培の情報は耳にするが、少なくとも現時点では少数の事例に留まっていることに違いはない。

² 本稿では、生産から流通までの最も一般的な形を取り上げているが、実際にはコモディティチェーンの内実はより複雑である。基本的に書面による契約に基づいた関係ではないため、各レベルのつながりは流動的であり、カヴァが生産され、製品として販売さらには輸出されるまでの間に、3~4 人の仲介・加工業者を挟む場合もあつたり、近年では海外の業者が直接農家に買付を行うこともあつたりする [Murry 2000]。

先住系フィジー人農家は、タロイモやキャッサバなどの作物を育てる傍ら、作付け面積あたりの利益率の高さ、季節性がないなどの栽培の容易さから、副業的にカヴァの栽培を行ってきた。また輸出作物としてのカヴァの生産を拡大しようと目論む政府によって、農家に対するカヴァの作付け推奨・支援も行われており、多くの先住系村落において、現在も小規模なカヴァ畑地が増加傾向にある [e.g. PHAMA 2018 ; Pollock 2009]。他方で統計的には少数であるものの、先住系村落内でも、大規模な畑地でカヴァ栽培を行う農家も存在する。筆者の調査地であり、フィジー有数のカヴァ栽培地域であるヴァヌアレブ島ザカウンロベ地方の主要都市サブサブからバスで1時間ほどのV村落でも、タロイモ畑の傍らに無造作にカヴァが栽培されている姿がよくみられる一方で、丘陵地の見渡す限りの範囲の土地で大規模なカヴァ栽培を行うカヴァ専業農家が存在した。そのうちの1人である20代後半のKは、2016年にカヴァ栽培を始め、わずか数年の間に村で最大規模の畑地を開墾するに至った（写真1）。彼は丘陵地の斜面で大量のカヴァを栽培し、収穫後、洗浄しそのままの状態、もしくは根や茎の部位別にカットしたのを乾燥させ、彼が所有する乗用車のトランクに積み込みサブサブ市場に持ち込む。



写真1 丘陵地にあるカヴァ畑。地面を覆っている植物の多くはカヴァ

（2022年10月6日、筆者撮影）

こうして村落において生産されたカヴァは、農家により近隣の市場の仲介業者に卸される、もしくは仲介業者が直接村落に買い付けに来るなどして、市場に流通・販売されていく。仲介業と一口に言っても、その中には、カヴァを一括で買い付けカヴァの製品を製造販売する企業や輸出企業に卸すもの、またカヴァの加工場を自ら保有し、カヴァの洗浄、選別、乾燥、市場への搬送までを一手に行うものなど様々な形態がある。そしてこの仲介・加工業で中心的な役割を担っているのが、インド系フィジー人であるとされてきた [e.g. Murry 2000]。実際に、上述した農家 K を含む、筆者の調査したカヴァ農家たちは乾燥させたカヴァ（主に高値で取引される根の部分）をサブサブ市場にいるインド系仲介業者に直接持ち込んだり、農家の近隣に住むインド系仲介・加工業者に持ち込んだりして、取引を行っていた（写真 2） [e.g. 大島 2023]。農家 K がカヴァを持ち込む市場ではほぼ全ての仲介をインド系業者が担っており、彼らが主要な取引先であるヴィティレブ島のカヴァ市場の動向等を勘案しながら、半ば一方的に買い取り価格を決定するとのことであった。農家側に買取価格に対する不満があっても、販路はインド系仲介業者が掌握していること、そして農家自ら販路を見つけ出すことの費用対効果の低さから、交渉が拘れることはないようだ。こうした先住系カヴァ農家とインド系仲介・加工業者という構図は、筆者の調査地に限らず、フィジー国内において一般的に広く見られる。一方で、筆者はサブサブの市場の近隣には、中国系住民の経営するカヴァの加工場があることに気付いた（写真 3）。



写真 2 農家が市場に持ち込んだカヴァ（2023 年 3 月 23 日、筆者撮影）



写真 3 カヴァ加工場の外観。手前の建物内に粉砕機がある（2023 年 3 月 23 日、筆者撮影）

加工場の経営者は他にもホテルなどの経営も行う地域で有数の起業家とのことである。工場の中には大型の粉砕機が設置されており、農家は乾燥させたカヴァを持ち込み、粉末に加工し

てもらう。通常少量のカヴァを粉末にする際には、筒状の鉄器にカヴァを入れ、重量のある鉄の棒で繰り返し叩き粉状にするのであるが、粉末を商品として販売する人などは、一気に大量のカヴァを短時間で粉末にできる粉砕機を使うことで手間を省くことができる。その加工場ではキロあたり 2.5 フィジードルほどの手数料を取り、乾燥したカヴァを砕いているとのことである。先述の大規模カヴァ農家 K の場合、乾燥させたカヴァの一部を自身の農園から乗用車でこの工場に運搬し加工したのち、小売用の小分け袋に分け自ら村落で販売を行う。この加工場を介してカヴァを小売する方法が、カヴァ農家のなかでどれほどの一般的なのかは現時点で不明であるが、話を聞いた複数のカヴァ農家も加工場の手数料やその後の販売のやり方を熟知していたことから、かれらにとってカヴァを売買する際の選択肢の一つとして確立しつつあるようだ。また加工場を経営する中国系経営者が、加工業以外に、栽培や仲介業にも関与しているのかどうかに関しては現時点では不明である。

すでに中国系住民のカヴァの生産への関与に関して言及したように、中国系住民のカヴァ産業への参与は近年始まったことではない。例えばナンディ国際空港や都市部の大型のスーパーなどで店頭に並んでいるパッケージングされたカヴァの製造・販売を行なっている有数の会社 L の創業者は中国系移民であることがわかった。彼は太平洋戦争前後にフィジーに移住し、現地の女性と婚姻したのち、カヴァの製品販売を行う会社を設立したという話であった。現在はその息子が会社を引き継ぎ、フィジーのお土産としてのカヴァ製品を製造販売する最大手の会社に成長させている。

さらに、筆者が予期しなかったことであるが、カヴァ産業に関係する日本人の存在もあった。ナンディにある日本人が経営する会社では、ナンディ国際空港や大型のスーパーなどで販売されているチョコレートを製造している。現在そのうちのひとつの商品として、カヴァの粉末を混ぜたカヴァチョコレートの販売を始めたそうである。オーナーへのインタビューによると、材料となるカヴァは、上述したカヴァの製造販売大手の会社 L から買い付けているとのことだ。もちろんこの事例はカヴァ産業への直接的な参与とは言えないが、これまでも日本人のカヴァ産業への参与はいくつか報告がなされている。例えば地理学者の Warwick Murray はヴァヌアレブ島東部にあるタベウニ島での調査時に、ある日本企業が島に民間のカヴァ農園を設立する可能性を検討すべく調査しているのを目撃したと報告している [Murray 2000 : 365]。

ここまで、現代フィジーのカヴァの生産・流通における民族横断的な関与の実態を指摘してきたが、最後に、カヴァの消費に関しても付記しておきたい。冒頭で述べたように、現在カヴァ

アの飲用は世代、性別、そして民族を越えて広がっている。とりわけ民族を越えた消費に関しては、先住系フィジー人の嗜好品としてのイメージが強かったカヴァは、現在ではインド系フィジー人にとっても一般的な嗜好品となっている [e.g. Mohanty 2017 ; 大島 2023]。そしてそうした消費の広がりは、中国系住民にまで及んでいる。筆者の調査村の住民によると、上述のカヴァ加工場を経営する住民をはじめ、サブサブの中心街に古くから住む中国系住民たちは、ヴィティレブ方言のフィジー語を話すなど、フィジーの生活・文化を受け入れており、日常的にカヴァを飲むことがあるようである。消費においても、民族横断的な広がりが見られるのである。

四 おわりに

本稿では、カヴァの商品作物化の中で進展してきたカヴァ・コモディティチェーンに注目し、民族横断的に行われる生産・流通の実態に関して報告を行った。筆者自身、今後の現地調査によって明らかにする必要がある課題も多い。とりわけフィジー国内のカヴァ・コモディティチェーンは、カヴァの需要と国内・国外双方の取引価格が上昇を続けているため、新規にカヴァ産業に参画するものも多い。カヴァの生産・流通に関しては、本稿でとりあげた事例以外にも、ヨーロッパ系住民のカヴァ産業への関与があるほか、近年フィジー国内において一大企業を築き経済界への影響力を持つ韓国系資本の参画が噂されるなど、カヴァ・コモディティチェーンにおける民族間分業や民族間関係の動態は刻一刻と変容を見せている。

そして先述したようにオセアニア島嶼地域在来の嗜好品としてのイメージが強かったカヴァは、現在オセアニア島嶼地域を越え、ニュージーランドやオーストラリア、そしてアメリカにまで消費が広がり、グローバルに広がりをを見せている [河野・大島 2022]。今後の長期調査においては、フィジー国内において民族の区分を越え広がるカヴァ・コモディティチェーンの実態を丹念に明らかにしながらも、それと同時に国境を越えたグローバル・コモディティチェーンの動向にも注意を払う必要があるだろう。

参考文献

大島崇彰 2023 「民族を越え広がるフィジーの在来嗜好品・カヴァ」『海域アジア・オセアニア NEWSLETTER』（海域アジア・オセアニア研究プロジェクト東京都立大学拠点）創

刊号：51-54。

河野正治・大島崇彰 2022 「カヴァ飲みのかくえーオセアニア島嶼内外における人と在来作物の多義的な関わり合い」 大坪玲子・谷慶一（編）『嗜好品から見る社会』 pp367-87、春秋社。

河合洋尚・大島崇彰 2024 「フィジー」 河合洋尚『南太平洋の中国人社会——客家、本地人と新移民』 pp.69-81、風響社。

丹羽典生 2010 「フィジー——多民族国家の中で」 熊谷圭知・片山一道（編）『朝倉世界地理講座—大地と人間の物語—15 オセアニア』 pp290-301、朝倉書店。

Bott, E 1987 The Kava Ceremonial as a Dream Structure. *Constructive Drinking*. M. Douglas (ed.) Cambridge University Press. pp182-204.

Lebot, V., Merlin, M & L, Lindstrom. 1992 *The Pacific Elixir Kava -the definitive guide*, Yale University Press.

Mohanty, M. 2017 Fiji Kava: Production, Trade, Role and Challenges. *The Journal of Pacific Studies* 37(1):5-30

Murry, W.E. 2000 “Neoliberal Globalization, ‘Exotic’ Agro-exports, and Local Change in the Pacific Islands: A Study of the Fijian Kava Sector.” *Singapore Journal of Tropical Geography* 21(3): 355-73.

PHAMA 2018 *Fiji Kava Value Chain Analysis*.

Pollock, N.J. 1995 The Power of Kava in Futuna and 'Uvea/Wallis. *Canberra Anthropology* 18(1.2) *The Power of Kava*: 136-65.

Prasad, N. and S, Raj 2006 The Perils of Unmanaged Export Growth: The Case of Kava in Fiji. *Journal of Small Business & Entrepreneurship* 19(4): 381-93.

Tuner, J.W. 1995 “Substance, Symbol and Practice: The Power of Kava in Fijian Society.” *Canberra Anthropology* 18(1.2) - *The Power of Kava*: 97-118.

(おおしま・たかあき 東京都立大学大学院)